

戦没者の遺骨と陸軍墓地

夫が戦没した妻たちの六〇年後の意識から

横山篤夫

The Remains of the War Dead and Military Cemeteries : From the Viewpoint of War Widows 60 Years On
YOKOYAMA Atsuo

はじめに

- ① 検討資料と留意点
- ② 陸軍墓地
- ③ 遺体・遺骨と陸軍墓地
- ④ 忠靈塔と陸軍墓地
- ⑤ 夫が戦死した妻たちの存在
- まとめにかえて
- ⑥ 「名誉の戦死」と莊重なセレモニー
- ⑦ 転機となつたガダルカナル島戦
- ⑧ 方島戦後終戦までに夫が戦没(1)
- ⑨ 方島戦後終戦までに夫が戦没(2)
- 戦後に夫が戦没した事例

[論文要旨]

戦没者追悼をめぐる論議は、靖国問題に収斂して扱われる傾向がある。しかし、戦没者追悼が対象とする範囲は軍人・軍属だけでなく日本人の非戦闘員も戦災死しており、さらに日本が植民地支配をしていた台湾や朝鮮の人々、そして戦場としたアジア、太平洋の各地の人々も含んで考えられるべきであろう。また一人ひとりの遺体・遺骨と靈魂（その存在を信じる人にとって）の追悼と集團としての記念や慰靈などが考察される必要がある。

現在研究が集中し、進んでいる分野がある一方、ほとんど検討されていない分野も多い。戦没者追悼の論議を発展させるためには、従来余り手をつけられてこなかつた面からも研究を進め、全体像を踏まえる必要がある。

そのための基礎的作業の一端として、国立歴史民俗博物館の実施した「戦争体験の記録と語りに関する資料調査」の報告書を資料として、戦没者の遺骨と陸軍墓地・忠

靈塔の関係を、夫が戦没した妻たちの六〇年後の語りをとりあげて分析した。

六〇年という時間を経過することにより、軍人・軍属の夫が戦没した妻たちは、人生を振り返つて見るというスケールで、改めて戦没前後からの生活とその意識を語っている。ただし話者が高齢であることから記憶が失われたり思い違いをしているのは止むを得ない制約であった。

戦没者の遺骨がほとんど還送されなくなるのは一九四三年のガダルカナル戦敗退後であった。同時に「名誉の戦死」を顕彰するシステムが破綻はじめる。そして戦後間もなく戦没者の遺族への扶助はなくなり公葬が禁止される。遺骨が還送されなくなると、妻達の視線からは陸軍墓地 忠靈塔は遠のき、やがて意識から消えてしまう。代わりに戦没者の遺影、仏壇、村や家の墓地に死者を身近に感じる一方、夫の靈魂を「英靈」として祀るという靖国神社に慰藉を求める意識が生じた傾向も見られる。